日本語教育と異文化伝道 ⑤

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

信仰者が伝えるべきこと

海外布教と日本語教育ということで連載を始めてから３年になるが、その間に筆者は定年退職し嘱託勤務となった。また身近な人の不幸もいくつかあり、天理教の教理で言われる「出直し」（死去）の意味について深く考えさせられた。その後、テレビもインターネットも新型コロナ一色になり、世の中が大きく動いていると感じた。これは世界規模で起こっていることでもあり、人々の意識に大きな影響を与えていると感じる。長引くコロナ禍で、なぜこのようなことが起こるのかと考える人も増えているのではないだろうか。とくに信仰を持たず、物事を科学的に考える人ならば、起こっている事例を過去の事例と比較したり、結果をもとに分析したりするであろう。一方で、何らかの宗教を信仰している人ならば、これは神仏の思いの現われだと考えるかもしれない。新型コロナ、地球温暖化など、世界レベルで混乱している今の世の中を明るい「神人和楽の世界」に変えていくには、天理教の信仰の立場から人々に伝えるべきことがあると筆者は考える。天理教の原典「おふでさき」には、「こふき」という言葉が 15 回用いられている。この言葉は現代の世の中を読み説く重要な鍵であると思うので、今回はこれにについて述べたい。

「こふき」は話の台

中山正善二代真柱の著書『こふきの研究』（天理教道友社、1957 年）によれば、「こふき」というのは「古記」という漢字を当て、「泥海古記」のように「この世元始まりのお咄」に限定されたものではなく、むしろ三原典とともに大事なものであり、教祖が口で伝えて傍の者が手記された「口記」ではないかとされる。「こふき」にどの漢字を当てるかについては諸説あるので割愛するが、教祖から直々に傍の人に「こふきを作れ」との話があり、高弟の山澤良助が筆を取り、明治 14 年に教祖にお目にかけたのが最初のようである。しかし、教祖はそれでよいとは言われなかった。教祖が現身を隠される明治 20 年までの間に書かれた「こふき」は、写本も含め、和歌体、説話体の物が残っている。筆者は、「こふき」こそが布教伝道するものにとって、口で伝える教えの話の台になるものだと考える。それは、国内・海外を問わず布教伝道する者にとって必携のものとなるのである。教祖の「こふきを作れ」との指示は明快だ。教祖は、誰の心にもしっかり治まり、陽気世界へと導くための「こふき」（話の台）を作るようにと望まれたのではないだろうか。

「和歌体」と「説話体」

『こふきの研究』の中では、和歌体十四年本（山澤本）の 161 首の全文と、説話体十四年本（手元本）、説話体十四年本（喜多本）、十六年本（桝井本）と、４種類が紹介されている。和歌体の山澤本はまるで「おふでさき」を読んでいるような錯覚を覚える。主にひらがなで書かれ、「人間創造の話」や「神名」などについて書かれている。また「出直し」の教理についても、和歌体でわかりやすく書かれているので少し紹介することにする。

「にんげんハしにいくなぞとゆうけれと　しにいくやないかり
ものかやす」「かやすのハみのうちほこりつもるゆへ　みのうち
神がしりぞきなさる」「このことをきものにたとへはなしする
こゝろのよごれはらさぬものハ」「あらハずバきてることをがで
けんから　なんぼをしてもぬぎすてるなり」。これらの歌に漢字を補い、現代風に解釈すれば、「人間は死んでいくなどと言うが、死んでいくのではなく借り物を返すのである」「返すのは身の内にほこりが積もるからであり、体の中から神が退かれる」「このことを着物に例えて話をする。心の汚れを払わない者は洗わないで着ていることは出来ないから、いくら惜しくても脱ぎ捨てるしかない」ということになろうか。さらにこの歌は続くが、現在、教えられている天理教の「出直し」の教理そのものである。現代の標準的な日本語であれば、誰でも理解しやすいだろうが、残されている「こふき」は大和言葉で書かれ、現代人には読みにくいものである。これらの「こふき」は親神の思いを教祖の口を通して話され、教祖に仕えていた傍の者が記述したものであり、誤字・脱字、また聞き間違いによる漢字のミスなど起こることは充分に考えられる。現代のようにスマホを取り出して、そのまますぐに録音というわけにはいかない時代の話である。耳で聞いて意味を咀嚼して筆を取り、書き留めていくしかなかった。それゆえ、後世に生きる信仰者は、文字の記録として残された「こふき」からその肝心な部分をよく吟味し、その時代の人にわかりやすく口で説ける「こふき」を作り上げ、人々に伝えていくしかないのかもしれない。

私の「こふき」

筆者の本棚に、『私のこうきのお取次ぎ―私のこうきの講義』（紺谷久則、私家版）という本がある。紺谷氏は海外布教伝道部ヨーロッパ課長などを歴任した方だが、「こふき」についても研究し、その成果を「私のこふき」としてまとめられたものである。この本は、上に挙げた「こふき本」や二代真柱の研究をもとに自身で悟り得たことも織り交ぜながら、人々に話し伝える際の台として作られたものである。本書の後半には英訳も載っており、海外布教で活用されることを願っていたものとも想像される。ここでふと思ったのであるが、これは日本語教育の中で、教案作成に通じる部分があるのではないだろうか。この連載の中で以前、「参考教案」について述べた。授業を行う上でその台本ともいえる教案は、先人が残したものを参考にしながらも、自分の言葉を用いて自分自身で組み立てたものでなければ、実際の授業を円滑に進めていくことができない。一字一句違わず、そこに書かれていることを述べれば完璧な授業が行えるという教案は存在しない。直接教えを受けた高弟が記した「こふき」でさえ、教祖はよしとされなかったことを考える時、やはり誰かが書いたものを完璧なものとして認めるのではなく、後に続くものが先人の研究をもとに更に磨きをかけてよりよきものを作り出すようにとの配慮があったのかとも思えてくる。そういうことに思いを馳せると、コロナ禍の現在、自分に与えられた仕事を神の御用だと受け取り、その御用の上で「こふき」を拵（こしら）え、よりよき社会を作り出すために最善を尽くせと急きこまれているようにも感じる。

（この連載も次号で最終回となります。）